

主の変容の主日

2023年8月6日前晩

菊地功大司教 メッセージ

主の変容の主日にあたり、マタイ福音はイエスがペトロ、ヤコブ、その兄弟ヨハネの眼前で栄光を示された出来事を記します。神の栄光に包み込まれたペトロは、あまりの驚きに何を言っているのか分からないまま、そこに仮小屋を三つ建てることを提案したと福音は伝えます。ペトロはその栄光の中にとどまり続けたかったのでしょうか。しかしイエスは、さらなる困難に向けて前進を続けます。

モーセとエリヤは律法と預言書、すなわち旧約聖書を象徴する存在です。それは神とイスラエルの民との契約であり、神に選ばれた民の生きる規範でありました。しかし響き渡る神の声は、「これはわたしの愛する子。これに聞け」と告げます。つまり、イエスは旧約を凌駕する新しい契約であり、イエスに従う者にとっての生きる規範であることを、神ご自身が明確に宣言されました。

ペトロはその手紙の中で、「わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません」と強調し、キリストの栄光に触れたときにどれほど心を動かされたのかを強調します。ペトロが伝えたいことの原点は、変容を目の当たりにしたときに彼の心を揺さぶった驚きでありました。

わたしたちは主イエスとの出会いに、心を揺さぶられたことがあるでしょうか。この人生の中で、どのような出会いに心を揺さぶられたことでしょうか。

教会は今日から10日間を、平和を想い、平和を願い、平和の実現のために行動するように呼びかける平和旬間と定めています。広島と長崎の日にはじまり終戦の日まで続く10日間は、抽象的な出来事ではなく、そこに一人ひとりの人間の心が揺さぶられた実体験の積み重ねの10日間です。そしてその10日間にとどまるのではなく、そこに至るまでの沖縄や南太平洋や中国や朝鮮半島を含めた人間の争いが生んだ悲劇の積み重ねと、いまに至るまで平和を確立することができずにいる中での多くの人の心の思いという、具体

的な出来事の積み重ねでもあります。わたしたちは抽象的に平和を語るのではなく、神が愛してやまない賜物である一人ひとりのいのちが、いま危機に直面している事実を心に刻み、その一人ひとりの体験に心を揺さぶられながら、平和を語らずにはられません。

平和を語ることは、戦争につながる様々な動きに抗う姿勢をとり続けることでもあり、同時に人間の尊厳を危機にさらし、いのちを暴力的に奪おうとするすべての行動に抗うことでもあります。

平和旬間にあたり、いのちの創造主が愛といつくしみそのものであることに思いを馳せ、わたしたちもその愛といつくしみを社会の中に実現することができるように、祈り、行動していきましょう。